

●発行日：2021年3月20日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行:教材出版 学林舎



学習の行き先

コロナによって学習は、 どう変わっていくのか？

新型コロナウイルスのパンデミックは、全世界に影響を与え、新しい生活様式が求められています。これは、学習における場においても例外ではなく、身体的距離を保ちながらも学習を進める必要があるため、学習方法のデジタル化が求められるようになりました。しかし、授業を配信する仕組みやオンラインで連絡をとる環境が整わず、すぐにはデジタルに切り替えられませんでした。これからの教育の場において、デジタル化はどのように進めていけばよいのでしょうか。

日本では、GIGAスクール構想（児童生徒向けの1人1台の端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、創造性を育む教育を全国の学校現場で持続的に実現させる構想）の実現に向けて、学校のICT環境を整える計画も進められています。

デジタル教材は、音声・写真・動画などを使い、視覚的に学習を支援することができ、QRコードを活用することで、アナログ教材との併用も可能です。また、インターネットを活用することで、学校に通学できない子どもも好きなときに授業を視聴することができます。これは、授業内容を理解できなかった子どもが復習する場合にも有効であるといえます。

教育のICT化には様々なメリットがある一方で、校内LAN設備などの環境に地域格差があることや、教員のITリテラシーに格差があるため、ICTに関する研修が必要になることなど、いくつかの課題があります。また、仮に端末が無償で与えられたとしても、現状、

また、仮に端末が無償で与えられたとしても、現状、デジタル教科書は有償のため、普及には時間がかかると予想されます。

日本ではICT教育が遅れていますが、日本の子どもがデジタル機器に慣れていないというわけではありません。多くの子どもがパソコンやタブレット、スマートフォンを日常的に使っていますが、その内容のほとんどはゲームやSNSによる友達との交流です。デジタル機器は遊ぶものという認識を変え、学習のための利用方法を指導することが求められるのではないのでしょうか。そのためにも、教員や保護者がICTの活用に積極的になり、知識を身につけることも重要になります。

教育のICT化が進んでいる海外の国では、学校へのコンピューターの支給やインターネットへのアクセス手段の提供、教員へのデジタルトレーニングを行ったことなどにより、子どもが必要な教材を自由に入手でき、経済力や居住環境などによる教育格差を縮められたところもあります。学習におけるデジタル活用の方法は、データベース、教材、クラス日誌、テストなど多岐に渡ります。紙の教材を持ち運ぶ必要がなくなることで、学習のスマート化や姿勢の改善につながり、さらに、家庭と学校が連携し、学習状況を管理することができるようになりました。また、リサーチやレポートの作成など、子どもが授業や宿題でコンピューターを使う場面も多く、教員とオンラインで連絡が取れることも当たり前になっています。

日本でも環境が整いつつあるものの、先に述べたような課題があるため、ICT教育が普及するのはまだ先のことになると思われます。とはいえ、すべてがデジタルのみのほうがよいというわけではなく、アナログ教材を併用することのメリットもあります。算数・数学における立体図形では、模型に触れることで図形そのものの形を実感することも大切です。理科では、自分の手を動かして実験を行うことで、その実験の結果について、より理解することができます。それに加え

でデジタル教材も活用することで、算数・数学では、例えば立体図形と展開図の関係を、理科では先の実験の別の結果などを、それぞれ理解することができるでしょう。児童生徒のよりよい理解の助けとなれるよう、環境を整え、従来のアナログ教材とデジタル教材をうまく併用していくことが大切なのではないでしょうか。（文／学林舎編集部）

学習の行き先

調べ学習を身につける

最近の学校では、「調べ学習」という言葉をよく耳にします。「総合的な学習」の時間がスタートしてからは、この時間に「調べ学習」をさせよう、という試みが積極的に行われるようになりました。では「調べ学習」とはどのようなねらいをもった学習活動なのでしょう。

文部科学省は、学習指導要領の改訂にあたって、「学校で学んだことが、子供たちの『生きる力』となって、明日に、そしてその先の人生につながってほしい。これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。」と記しています。つまり、自分で課題を見つけて、学び、考え、判断し、行動し、問題を解決する能力を培うことで『生きる力』を養ってほしいということです。そして、まさにこの『生きる力』を鍛錬する方法の一つが「調べ学習」なのです。

「調べ学習」は、自分が何を知りたいのか、日々の中で、「なぜ?」「どうしたらよいのか?」という課題を見つけ、自分で調べ、自分で考え、自分で判断してまとめるという一連の流れです。つまり「調べ学習」とは『生きる力』を育もうというねらいをもった学習活動なのです。

それでは、具体的な「調べ学習」の進め方をみていきましょう。

1 テーマを決める（→「探究する力」の鍛錬）

自分の生活の中で疑問をもったり、興味がわいたりしたことをテーマに取り上げます。そのためには、常に自分のまわりのことがらに疑問や好奇心のアンテナを張り巡らせることが必要になります。これは物事を観察する力、探究する力を養うことにつながります。

2 調べる（→「調べる力」の鍛錬）

調べる方法には、以下のようにさまざまな情報源があります。

- ・百科事典・辞書、図鑑などの本
- ・統計資料集や白書などのデータ集
- ・新聞や雑誌など
- ・インターネット

調べる内容によって、どのような方法を用いればよいのか、どのような媒体をさがせば答えに近づけるのか、問題の解決方法を探索する力を養います。

3 考える（→「思考する力」「知識を活用する力」の鍛錬）

本や新聞を調べ、情報を集めて丸写ししただけでは「学習」にはなりません。情報を集めるという作業をただです。複数の情報から、自分に必要な情報を選択し、得られた情報をよく読みこんで、自分の知識と照らし合わせ、自分の頭で考え、自分で解答を構築していくことが大切です。これが「思考する力」です。インターネットで検索をした場合も同様です。インターネット上の情報を鵜呑みにせず、その情報はだれが発信したものかを調べ、信用できる発信者の情報か考える必要があります。YouTubeでの配信も同様です。何が正しくて、何が間違った情報なのかを吟味する情報リテラシーの育成にもつながっていきます。



4 発表をする(→「伝える力」「表現力」の鍛錬)

得られた情報を整理し、人に伝わるように工夫してまとめます。どのような順番で、どのような資料を示し、どのように発表すればよりよく伝わるのか、人に「伝える力」の鍛錬になります。

このように、「調べ学習」には「探究する力」「調べる力」「思考する力」「人に伝える力」などを養う要素が含まれています。どれも『生きる力』に直結しています。文部科学省が記したように、これからの社会は予測困難な時代に突入することでしょう。そのときに、子どもたちがよりよく生きていけるように、「調べ学習」によって『生きる力』を育んでいくことが期待されます。

(文／学林舎編集部)

クロスロード crossroad

第115回 文／吉田 良治

世界最先端の学業とスポーツ

2月から朝日新聞で、ハーバード大学へ留学された佐野月咲さんの連載記事が掲載されてきました。佐野さんは女子アイスホッケーのU-18日本代表にも選ばれた若手のトップアスリートですが、高校2年生の時にU-18日本代表から落選したことで、大学進学が目標が東京大学からハーバード大学へ変更されました。ハーバード大学といえば世界トップクラスの大学（イギリス・タイムズ誌の世界大学ランキング3位）です。東京大学が世界大学ランキング36位ですので、学業でもより高いレベルを目指されました。しかし、目的には学業だけでなく、アイスホッケーでもレベルアップを考えての大学進学でした。

ハーバード大学の女子アイスホッケーチームは、オリンピックメダリストを多く輩出するアイスホッケーの名門です。ハーバード大学が所属するアイビーリーグには、オリンピック決勝を争うアメリカ代表とカナダ代表が多く所属している大学がひしめいています。つまり、常にオリンピック決勝レベルの戦いの場がそこにあるということです。

アメリカの大学では学業成績が基準（G.P.A2.0以上）を満たさないと、スポーツ活動に参加することができません。一般の学生でも単位を取得することが容易でないハイレベルな学業基準をクリアし、そのうえでスポーツでも世界のトップを争うスーパーアスリートの集まる場、それがアメリカの大学スポーツです。一方、日本では学業では進学できなくても、高校時代のスポーツ競技の実績さえあれば、学業成績を問わないケースも少なくありません。

アメリカの大学ではスポーツ推薦といえど高校での学業成績は重要で、求められる学業の質は一般の受験生と何ら変わることはありません。大学に入れば大学の学業成績で基準をクリアできなければ、スポーツ活動に参加できなくなるばかりか、大学に在籍し続けることもできなくなります。アメリカのスポーツ推薦のメリットは、高額な学費に対する奨学金の獲得にあります。州立大学なら4年間で500万～1,000万円、ハーバード大学など私立大学になると、4年間で家一軒（2,500万～3,000万円）に匹敵する費用（学費、教材、寮、食事など）が必要になります。その費用を給付型奨学金で賄うことができるのが、アメリカのスポーツ推薦の最大のメリットといえます。その奨学金も学業成績が基準を満たさなければ打ち切られるので、大学を去るしかないのです。

昨年朝日新聞のWebニュースのWithnewsで、私が以前フットボールチームのアシスタントコーチをした、ワシントン大学に留学している荒川夏帆さんの特集記事が掲載されました。ワシントン大学は世界大学ランキング29位と、こちらも教育レベルの高い大学です。荒川さんはテニスチームに在籍し、全米ランキング上位を破るなど、全米週間MVPにも選ばれました。そして、学業成績はG.P.A4.0の満点を記録するなど、こちらも学業とスポーツでトップレベルを実践されました。

日本ではスポーツに専念しないと強くなれない、海外の選手に比べ日本人は体力で劣るので、練習量が多くないと勝てない、という考えが根深くあります。しかし、佐野さんや荒川さんのように、スポーツ偏重という日本の環境を飛び出して、学業とスポーツの両立や多様な生き方を実践しながら、競技力を高める若者が増えてきました。

優秀な日本人若手アスリートの海外流失が続く中、日本ではアメリカの大学スポーツをモデルに、2年前に大学スポーツ協会・UNIVASが設立されました。日本でも学業とスポーツの両立できる環境“文武の2つの道を同時に歩くのではなく、一つの道の中に文と武の両方がある！（佐野月咲）”、多様な生き方が実践できる環境作りが求められています。（つづく）